

乳幼児に多い感染症の種類と出席停止について

園では感染症を予防するために感染した園児に対して出席停止を行なうことがあります。これは学校保健法第 12 条に基づき、集団発生を防ぐとともに子どもの健康の回復を図るためです。乳幼児は体力もなく、合併症等の危険もありますので、ぜひご家庭でゆっくりと休養させてあげてください。

また伝染病には第一種学校伝染病(治療するまで出席停止となるジフテリアなど珍しい伝染病)、第二種学校伝染病(乳幼児によく起こる身近な伝染病。診断がついたら園へ速やかに連絡する)、第三種学校伝染病(本人の状態での取り扱いを決め、園医、その他の医師が伝染の恐れがないと認めるまで出席停止)があります。

第二種の伝染病 乳幼児によく起こる伝染病。診断がついたら園へ速やかに連絡しましょう。

病名	出席停止期間	主な症状	潜伏期間	伝染可能期間	感染経路	流行期	備考
インフルエンザ	発症後5日を経過し、かつ解熱した後2日を経過するまで。	突然の高熱や強い頭痛、全身倦怠感、筋肉や関節の痛み、食欲不振、咽頭痛、せき、くしゃみ、鼻水、おう吐、下痢、腹痛がある。	1~2日	3~4日	鼻腔、咽頭、気道粘膜の分泌物からの飛沫感染。ウイルスで汚染されている手指から感染することもある。	冬	伝染力が強い。 ※予防接種あり。
百日せき	特有なせきが消え、伝染の恐れがないと認められるまで。	最初のかぜのような軽いせきで、くしゃみや鼻水が出る。発病後1~2週間を過ぎるとせきが激しくなる。	1~2週間	発病後28日。	飛沫感染。せきやくしゃみで菌が広がる。	冬~春先だが一定ではない。	※予防接種あり。
麻疹(はしか)	解熱した後3日を経過するまで。	最初が発熱、せき、鼻水、目やになどかぜのような症状。発熱後4日目より皮膚に発疹が現れる。ほおの内側に白い斑点(コプリック斑)ができる。	10~12日	発疹の出る5日前から出た後5日間。	飛沫感染。	春~夏	※予防接種あり。
流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)	耳下腺のはれがひくまで。医師の判断による。	37~38℃の発熱があり、両側のおごの後ろ(耳下腺)が大きくはれて痛む。食欲不振でえん下が困難に。	14~24日	発病前7日から発病後9日。	飛沫感染。	春~夏	合併症として髄膜炎のおそれがある。 ※予防接種あり。
風疹(三日はしか)	発疹が消えるまで。	はしかに似たピンク色の発疹が顔、首、おなかに出始め、やがて耳の後ろや首のリンパ腺ははれる。目が充血し、のどが赤くなり、せきが出る。	14~21日	発疹の出る7日前から出た後の7日間。	飛沫感染。	春~夏	三日目ぐらいをピークとして発疹が消えるので「三日はしか」とも呼ばれる。 ※予防接種あり。
水痘(水ぼうそう)	発疹がすべてかさぶたになるまで。	微熱が出て、全身に発疹ができる。赤い斑点で中央に水ぶくれができ、かゆみがある。発疹は2~3日がピークでその後乾いて黒いかさぶたになる。	14~21日	発疹の出る1日前から出た後の7日間。	飛沫感染だが膿、水痘中にウイルスがいるため接触感染も。		伝染力が強い。 ※予防接種あり。
咽頭結膜熱(7-ル熱)	発熱、咽頭炎、結膜炎の症状が消えた後、2日を経過するまで。	39℃前後の高熱が4~5日続く。のどの痛み、せき、目やにや目の充血がある。頭痛、吐き気、腹痛、下痢を伴うこともある。	5~7日	発病後2~3週間。	飛沫感染。かぜのひとつで7-ルを介して感染することもある。	夏	
結核	伝染の恐れがなくなるまで。	せき。家族に結核の患者がいるときは疑う。		症状のある間。	飛沫感染。		※予防接種あり。

乳幼児に多い感染症の種類と出席停止について

第三種の伝染病 病状により園医その他の医師が伝染のおそれがないと認めるまで出席停止。							
病名	出席停止期間	主な症状	潜伏期間	伝染可能期間	感染経路	流行期	備考
流行性角結膜炎 (はやり目)	医師が伝染の恐れがないと認めるまで。	伝染性の角膜炎と結膜炎が合併する目の伝染病。白目が赤く充血する。目やにや涙が出る。	5～7日	発病後2～3週間。	フールの水、手指、タオルなどを介しての接触感染でフールで感染することが多い。		伝染力が強い。
急性出血性結膜炎 (アボ口病)	症状が治まるまで。	白目が赤く充血する。	1～2日	症状が出る1日前～発症後2日。	接触感染。		
腸管出血性大腸菌感染症 (O-157)	下痢のある期間。	下痢、おう吐、腹痛。	4～8日	下痢のある期間。	経口感染。		
その他の伝染病 出席停止の設定基準は、保護者、園、園医、かかりつけの医師の合意のもと、定めることが望ましい。							
病名	出席停止期間	主な症状	潜伏期間	伝染可能期間	感染経路	流行期	備考
溶連菌感染症	医師の判断による。抗生剤治療を行えば24時間以内に他人への感染を防ぎ、病原菌を抑制できる。感染の危険がなくなったことを医師に確認する。	溶連菌という細菌がのどに感染し、のどの痛み、38～39℃の高熱、おう吐、腹痛、頭痛などが起きる。体や手足に発疹が出て、舌はイチゴのようにフツフツになる。	2～7日	主症状が消え、感染の危険がなくなるまで。	飛沫感染。	秋～冬	
手足口病	医師の判断による。	夏かぜのひとつ。初期は指、手のひら、足の裏、唇やほおの内側、舌に白い水疱の発疹が出るが熱は高くない。発疹がおしりやひざにも出ることもある。水疱が破れて潰瘍となり、2～3日で炎症がおさまる。	3～6日	水疱疹が消えるまで。	飛沫感染。排せつされた便から感染することもある。	初夏～秋	
伝染性紅斑 (リンゴ病)	本人が元気であれば出席停止の必要はないが、医師の判断をあおぐようにする。	ほおがリンゴのように丸く、赤くなる。発疹がおしりや太もものあたりにでき、レース状や網状に見える発疹部分はぼてり、痛み、かゆみがある場合も。	1～2週間	主要症状が消えるまで。	飛沫感染。		
ヘルパンギーナ	医師の判断による。	夏かぜの一種。39℃前後の熱が2、3日続き、のどの奥に小さな水疱ができるため食欲が落ち、吐くこともある。2、3日で水疱がつぶれて痛みが増し、つばを飲み込むのも痛い。よだれも出る。	2～4日	発病前2日～約3週間。	経口、飛沫感染。	夏	
伝染性膿痂疹 (とびひ)	特に出席停止の必要はなく、範囲が広い場合は包帯などで覆うとよいが、医師の判断をあおぐようにする。	透明な水疱ができ、やがて白くにごる。水疱は破れやすくてかゆみがあるため、かきむしると菌がうつる。	2～10日	化膿した部分が治るまで。	接触感染。虫刺されやすけい傷に菌が感染して起こる皮膚病。かさぶたにも感染性が残る。	夏	タオルの共用をやめ、石けんをつけて洗い手で予防できる。
感染性胃腸炎	下痢をしている間。	下痢、おう吐。	1～2日	症状が出てから4日間。	経口感染。	主に冬	原因ウイルスとしてロタウイルスやノロウイルスがある。
マイコプラズマ肺炎	症状が改善すれば出席停止の必要はないが、医師の判断をあおぐようにする。	発熱、せき。	1～2日	症状が出る1週間前～症状が出て1か月。	飛沫感染。		排菌は長期にわたる。